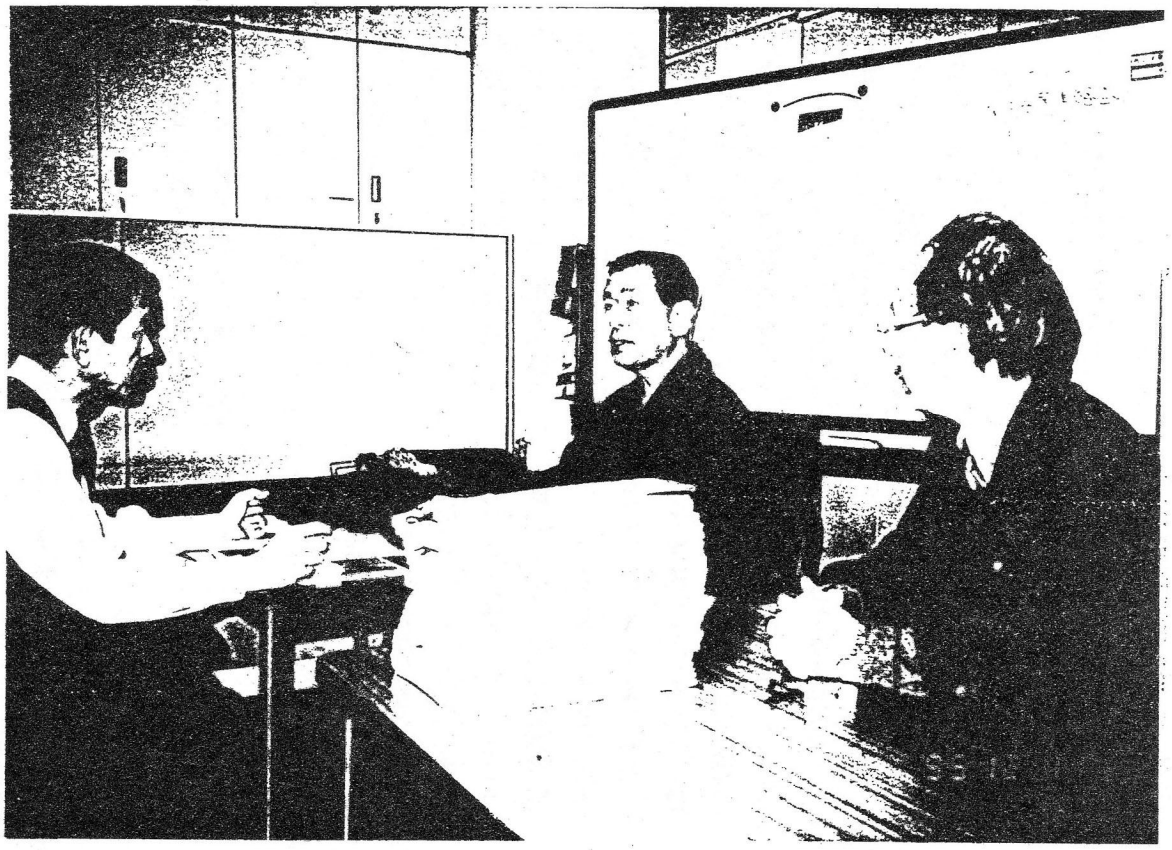
日吉台地下壕保存の会
会　報

第36号
発行　日吉台地下壕保存の会
編集　事務局
223 横浜市港北区下田町3-15-27
寺田方　TEL.045-562-1282
（年会費）一口千円で、一口以上
郵便振込口座番号00250-2-74921
（加入者名）日吉台地下壕保存の会



一九九五年一二月一一日
日吉台地下壕の保存を求める
署名を市庁舎で提出する
鮫島会長と寺田事務局長
中央の白い山は第一回分の
八〇〇〇名の署名簿

目　次　　ページ

陳情署名のお礼　2
保存運動に希望の灯が・・・　2
鉛の兵隊とオウム　3
陳情署名等新聞記事　4～5
連載日吉台地下壕
　当時の関係者の思い出話13　6～7
幹事会報告　7～8
運営委員会報告　8

「（旧海軍）連合艦隊司令部日吉台地下壕の保存を求める署名」にご協力いただき有難うございました。
一万六千名の署名を一二月一一日に市庁へ一二月二二日に県庁へ提出しました。

++++++++++++++++++++++++++++++++++++++

保存運動に希望の灯が・・・

事務局長　寺田　貞治

会員の皆様、明けましておめでとうございます。

昨年は戦後五〇年ということで、かねてから企画していた日吉台地下壕の保存を求める署名運動に取り組みました。皆様のご協力のお陰で、昨年一〇月、一一月の二ヵ月間で、約一万六千名の署名を集めることができました。

約五〇〇名の会員の皆様やこれまでの当会の行事に参加された方の中から約一五〇〇名の方々に趣意書と署名用紙を三回に分けて発送しました。大変な作業の最中に神奈川県高等学校教職員組合が署名に取り組んでくださること、また横浜市教職員組合も戦後五〇年ということで、署名運動に取り組んで下さるということがわかり、喜び合いました。ご協力くださった大勢の方々に厚くお礼申し上げます。

早速、一二月一一日に市庁に、二二日に県庁に提出してまいりました。

これとは別に市の文化財課長に三度ばかり会いまして、市の対応を聞きましたところ「議会ではこの問題は継続審議になっており、市としても何とかしたいと考えており、決して無視しているわけではない」とのことでした。近いうちに地下壕に入って内部の状態などを見る予定になっています。

このように市の方は、少し動きが出てきましたが、県の方は日吉台地下壕のことはよくわからないので勉強してからということでした。

私たち保存の会の運動も丸八年になろうとしていますが、やっと運動に希望の灯が少し見えてきました。しかし、まだどうなるか予断を許しません。クリアーすべき難しい問題が多く残っています。

これからもなお一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

記者会見場

鉛の兵隊とオウム

会員　小島　清文

同じ鋳型に嵌められてポンポンと打ち出された「鉛の兵隊」の玩具のような画一的な兵士たちを生んだかっての教育が、戦後も生き残って、今度はオウムの兵士たちを生んだ。

戦前、私有財産制度擁護を建て前に、労働者や農民の生活改善運動を徹底的に弾圧し、地主や企業の利益を図った体制が、戦後もそのまま生き残って、今度も同じ理由で、神戸大震災の被災者たちには自分で再建しろと言いながら、バブル崩壊による大銀行、住専等が自ら招いた経営破綻には巨額な国税を注ぎ込む。

この国は戦前戦後、何が、どのように変ったのであろうか。民主主義国家になったというものの、戦後五十年は幻だったのだろうか。

我々は自分たちの社会が、国家が、どうあるべきかを本当に考えたことがあるのだろうか。選挙で議員を選ぶ。一体なんのために、誰のために議員を選らんでいるのであろうか。そして選挙は本当に自由か、どうか。意図的な選挙制度で少数者の意見が押さえられていないかどうか。

一人一人が考え、判断して、行動するようになるならば、そして自立的な人間が育てられるならば、社会も、国家も変わる。なぜならば、国家とは我々自身のことだからである。言葉を変えれば、我々が国家の主人公なのである。我々なくして、国家はないし、地方なくして中央もない。最近「地方分権」という言葉を良く聞くが、本来は地方主権（地域主権）であり、中央分権である。本来、我々が持っている主権の中で、中央に任せた方がよいもの、例えば外交とか、通貨等については中央に分権するが、原則的には主権は地方に、我々ひとりひとりに存するのが主権在民、民主主義社会の在り方である。

その意味で国や中央の一部の人たち、特に文部省あたりの小役人が、地方の優れた教師たちの自主的な教育への考え方、情熱を無視して、人間の在り方、教育の在り方を教育指導要領の名の下に一方的に決めるとか、本来は個々の人間の思想信条にかかわる「日の丸」の掲揚を強制する等ということは許されることではないし、思い上がりも甚だしいと言わなければならない。

今日、地方の教育現場で、どれだけ多くの真面目な教師たちが、中央からのこうした一方的、独断的な指示に苦しみ、悩んでいることか。ここでも我々は、なんのために、誰のために議員を選んでいるのか、我々のための政府とはどういうものなのか、もうこのへんで一度考え直して見る必要がありはしないか。

（「不戦兵士の会」顧問。慶応義塾大学経済学部卒）

地下壕保存へ署名

横浜・港北区

横浜市港北区日吉四丁目の慶応義塾大学の下に残る日吉台地下壕（ごう）を保存しようと、市民団体「連合艦隊司令部日吉台地下壕の保存をすすめる会」が、地下壕に近い東急東横線日吉駅前で、保存を訴える陳情書への署名を呼びかけた。陳情書は十二月に県と横浜市に提出する予定だ。

地下壕は同大キャンパスの真下などに五つある。第二次世界大戦末期に旧海軍の連合艦隊司令部などが入っていた。同会は一九八九年、戦争の悲劇を二度と繰り返さないためにも歴史の証人として地下壕を保存しようと結成された。

会員の同区綱島東五丁目、広告製作業壱岐尚子さん（四九）は「父が生きて帰れたから私が生まれたんです。ここに戦争があったという事実を伝えていきたい」と話していた。

朝日新聞　一九九五・一〇・一四

日吉台地下壕保存求め陳情

横浜市長に市民団体

連合艦隊司令部日吉台地下壕（ごう）の保存をすすめる会（会長・鮫島重俊慶応大学名誉教授）は十一日、同地下壕の保存と資料館建設を求め、七千八百十人の署名を添え、陳情書を高秀横浜市長に提出した。

横浜市港北区の日吉地区には第二次世界大戦末期に使われた、延長約五キロにわたる地下壕が点在するが、同会が保存を求めているのは慶応大キャンパス地下の連合艦隊司令部のあった約一キロの部分。

「手つかずのまま残る、第一級の戦跡」（鮫島会長）として、多くの人が見学できるように整備し、歴史や平和教育のための資料館を併設することを求めている。

連合艦隊司令部が使用した部分は内部が厚さ約四十センチのコンクリートで囲まれ、幅二メートルから四メートル、高さは二メートルから三メートルもあり、作戦室、電信室、暗号室、司令長官室などの跡が残っている。

神奈川新聞　一二・一二

保存求め陳情

（連合艦隊の地下ごう）

有志が横浜市長に

横浜市港北区に残る旧海軍連合艦隊司令部の地下ごうについて、地域住民らによる「連合艦隊司令部日吉台地下壕（ごう）の保存をすすめる会」（鮫島重俊会長）は十一日、同地下ごうの保存や見学ができるような整備を求め、高秀秀信市長に陳情書を提出した。

朝日新聞　一二・一二

母校と戦争の関係　生徒が調べて展示

慶応高校の文化祭

母校がどのように第二次大戦にかかわっていたかを知ろうと、生徒自身による地下壕（ごう）の調査結果や、当時の資料などを集めた展示が、横浜市港北区日吉の慶応義塾高校文化祭で行われている＝写真。

学校がいかに戦争の渦に巻き込まれていったかが、貴重な写真や資料で明らかにされており、見る人に戦後五十年を考えさせる展示になっている。二十二日（午後四時）まで。

同校の日吉キャンパスは、一九四四年から旧日本軍の大本営軍令部や連合艦隊司令部などが接収し、地下壕を建設し始めた。地下壕は敗戦の日まで掘り続けられ、現在も学生たちがかっ歩するキャンパスの下には、約二・六キロにわたる地下壕が眠っている。

今回、この地下壕の調査を行い、資料などを集めて展示を開いたのは、同校の三年生六人でつくる「戦争を考える会」。

日吉台地下壕を保存する運動を続けている寺田貞治教諭（六三）の指導のもと、夏休み前から計画を立て夏休み中に実際に地下壕に入って、距離や幅、高さなどを綿密に調査し、図面にまとめた。さらに東京・三田キャンパスの図書館に通い、写真の複写や、資料集めなどを行って今回の展示に備えたという。

同会の児玉兼吉さんは、「地下壕の存在は知っていたが、実際に入ったのは初めてだった。戦争中に先輩の塾生が戦争とどうかかわっていたか調べたことが一番面白かった」と話していた。

神奈川新聞　一九九五・一〇・二二

私たちの署名運動や慶応高校の文化祭の取り組みが新聞記事になりました。ご覧になられましたでしょうか。

戦争遺跡として保存、公開を

旧連合艦隊司令部「日吉台地下壕」

慶応大構内

大学関係者ら署名運動　横浜市が現地調査へ

第二次大戦末期、旧海軍の連合艦隊司令部が置かれた、慶応大日吉キャンパス（横浜市港北区）内の「日吉台地下壕（ごう）」を戦争遺跡として保存し、公開するよう求める動きが高まっている。

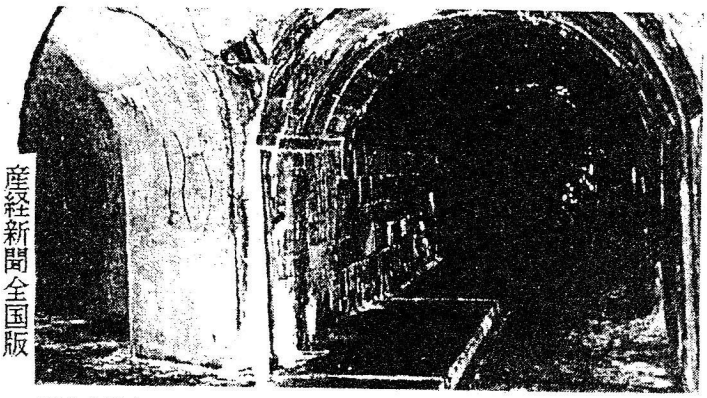
同大関係者や地元住民でつくる壕の「保存をすすめる会」（会長・鮫島重俊慶応大名誉教授）は約一万六千人の署名を集め、昨年末、神奈川県や横浜市に保存整備や資料館の建設を要望。これを受けて同市文化財課は近く、現状確認のため現地調査する。

慶応大日吉キャンパスには、昭和十九年二月に旧海軍軍令部の情報部が移り、同年夏から地下壕建設が始まった。

保存をすすめる会の調査などによると、地下壕は長さ約一キロ。厚さ四十センチのコンクリートで覆われた堅固な造りで、作戦室や発電機室などの跡が残る。当時は通信隊などが入り、レイテ戦や沖縄戦などの作戦指令が出されたという。

壕は日吉地区全体では延長五キロに達するとされるが、現在、壕の出入り口はキャンパス近くの民家の一カ所を除きすべてコンクリートブロックなどでふさがれ、内部も放置されたままになっている。

保存をすすめる会の寺田貞治事務局長（慶応高校教諭）は「日吉台地下壕は戦史的にも沖縄や松代大本営（長野県）の壕と並ぶ第一級の遺跡。国の史跡名勝記念物指定基準が昨年改正されて、戦跡もその対象に含まれることになったので、まず地元の自治体が国に指定を働き掛けてほしい」と訴えている。



慶応大日吉キャンパスに残る旧日本海軍連合艦隊司令部の地下壕＝横浜市港北区

産経新聞全国版　一九九六・一・一九

文化祭でも「戦後50年」

神奈川の高校で発表相次ぐ

慶応高　新羽高　旧海軍の地下壕調査　弾薬製造、証言集め

戦後五十年の節目に、文化祭で戦争を取り上げる高校が相次いでいる。横浜市港北区の慶応義塾高校の生徒六人は、旧海軍連合艦隊司令部があった日吉台地下壕（ごう）に潜り、内部の図面を作った。神奈川県立新羽高校では新聞部の生徒五人が、弾薬製造工場で働いていて暴発事故に遭い、麻酔なしの手術を体験するなどした人たち七人から聞き取りをした。

慶応高校の六人は選択地学クラスの三年生。これまでも壕の存在は知られていたが、中に入った生徒はほとんどいなかった。

六人とも戦争に特別の興味はなかった。だが今春、地下壕保存活動をしている先生の提案に、「戦後五十年だし、知っておいてもいいかな」と「戦争を考える会」をつくった。

長ぐつをはき懐中電灯を手に、地下水や泥がたまる壕に四回潜った。作戦室、通信室、長官室跡など、網の目状に、二・六キロほどにわたって延びる内部の測量や撮影をして図面を作った。

メンバーの一人、水谷伸吉君は「日本を動かしていた場所が学校の下にあったなんて。この調査で大きな役割を果たしたようでうれしい」と話した。

旧海軍が使っていた地下壕内部の様子を調べる慶応義塾高校の生徒たち＝横浜市港北区日吉四丁目で

祖父の体験に思いをはせる生徒もいる。陶山直幸君の祖父はビルマ（現ミャンマー）などで激戦をくぐり抜けてきた。陶山君の企画に、驚いていたという。

六人は「これを機会に、この五十年と民主主義について考えてみたい」「平和を当たり前と思ってきたが、これからは、かつては平和がなかったという事実も知らなければいけない」と照れくさそうに話した。

二十一、二十二日の文化祭で発表する。

一方、県立新羽高校の五人は、横浜市青葉区のこどもの国にある旧陸軍の弾薬庫跡を調べ、ここで働いていた人たちから聞き取りをした。十月初めの文化祭で発表したが、弾薬の暴発事故で右目を失った人の体験談は、壮絶で生々しかったという。生徒たちは「弾薬庫があったことも知らなかった。ショックだった」と話していた。

朝日新聞　一九九五・一〇・一四

連載
日吉台地下壕
当時の関係者の
思い出話　13

日吉の日々　5

元連合艦隊司令部暗号科に所属し暗号の解読に当っていた野口氏に伺います。

野口　昭二氏の話
（ききて：寺田貞治）

私は昭和一七年に一五才で久里浜の海軍通信学校第六二期生として入隊し、七～八ケ月暗号を学び、海兵団で二年間過した後、暗号にまわされ、東京通信隊に三ケ月いた。その後トラック島に行き、戦艦大和に一〇ケ月、戦艦武蔵に一〇ケ月程乗った。この時山本五十六連合艦隊司令長官の戦死を聞いた。

トラック島に上陸、二ヵ月を過したが、補給が途絶え、トカゲなど食べられる物は何でも食べた。この頃、古賀長官が飛行機で比島のダバオに向う途中戦死した。

その後、巡洋艦大淀に乗り、横須賀、追浜、木更津などを往き来した。

艦に乗っている時は、洗面器に二杯の水が配給され、これで歯を磨き、顔を洗い、身体を拭いて洗濯もした。使った水はドラム缶に入れ、後で甲板掃除に使った。

長官が食事をする時は、停泊中であれば長官室の上で軍楽隊が演奏した。戦闘準備に入ると軍楽隊は暗号配達の役目に変った。艦の左舷は下士官・兵、右舷は前方に幕僚、後方に長官がいた。

木更津沖に停泊中、暗号科の三分の一が下痢を起こして入院した。退院後、私は日吉に先発隊としてやってきた。

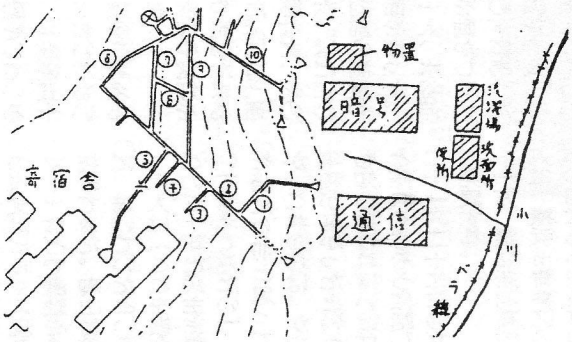
昭和一九年九月三〇日に司令部本隊が日吉に移転するのだが、その前に、私達五～六名の暗号隊員が移ってきて、慶大の北寮で一〇日程寝泊りし、暗号の解読を慶大の馬場近くの素掘りの地下壕で行なっていた。特信班も六名位いた。

司令部本隊がくると慶大教職員宿舎（現慶高日吉会堂南側）に移り半月程いた。

隊員が増えたので柔剣道道場（蝮谷の現慶大空手道場）に三回目の引越しをした。通信科は弓道場に入った。

最後に一番南の地下壕出入口近く（現足立宅）にカマボコ兵舎を作り、移転した。通信隊の兵舎は南側に、暗号隊の兵舎は北側に並行して建てられ、何れも掘り出された土砂で半分埋り、半地下になっていた。

カマボコ兵舎の東側に洗濯場、洗面所、便所があり、更に東側の川に沿ってバラ線が張ってあり、そばに歩哨が立っていた。カマボコ兵舎では



シラミがわき、ドラム缶に湯を沸して入り、退治した。風呂に入った記憶はなく、いつも洗面所で身体を拭いていた。

日吉での食事は、麦や豆の多い御飯で、おかずはよくなかったが、十分食べられた。一膳飯なので若い兵士は足りなかったかも知れない。朝食は御飯に味噌汁、漬物位。昼食と夕食は三～四品位ついた。下士官以下の兵の食事は、寄宿舎と現高校校舎の間の烹炊所で作った。食事当番は烹炊所から二人で一回に一〇人分位を丘の下に運んだ。士官（尉官）の烹炊所は、北寮の一階にあり、三人で副食を作っていた。寝泊りもこの二階でしていた。佐官以上は中寮の烹炊所で作った。長官の食事は南寮で特別に作られた。将校・士官と下士官以下では食事の内容が違っていた。副食の材料は民間から仕入ていた。

近くの川にザリガニがいて、物置でテンプラにして食べた。勿論見つかると罰っせられた。近くの農家に入って御飯を盗んで食べた兵士が捕まったことがあった。

暗号科は一五五名いて、草鹿部隊といった。暗号長（大尉）と掌暗号長（中尉）は暗号室で日本の重要な暗号であるトクキン（特別緊急軍極秘）を解読していた。将校しか触れることはできなかった。米国からの情報は特信班が解読に当った。

私達はトクキン以外の日本の暗号を訳したり、司令部から発送する文を暗号に変えたりした。暗号を訳し、参謀に届けたり、参謀からの命令書を暗号に変えて通信科に渡したりした。

暗号科の中でも、暗号に慣れているのは、私を含めて六名に過ぎなかった。殆どの人は少し暗号の教育を受けてきただけで、雑役や上官の身のまわりの世話や、烹炊所からの食事の運搬をしたりしていた。

通信科も暗号科と同じ位の人がいた。その他、信号関係や烹炊関係の人がいた。

地下壕の1Aの⑨の北半分に暗号隊が、南半分に通信隊がいた。⑩の片側に乾燥味噌・醤油・ゴム袋に入った米が置いてあって、非常に狭く一人がやっと通れる位であった。

⑦は幕僚室で作戦会議をした所である。中島参謀は地下壕と寄宿舎の間を暗号を持って往き来していた。日吉では負け戦さの暗号が多かった。

（生協ニュース教職員版第四七号より抜粋転載）

幹事会報告

九月二七日第三回日吉地区センター

報告

一、七月二二日慶応義塾理事と鮫島会長、東郷副会長、寺田事務局長が会見。詳細は第三五号に掲載済

二、八月五日藤沢市民有志による見学会一〇数名参加

三、同七日会報第三四号発行

四、同一一日～一三日かながわ戦争展95開催

五、同二〇日港北区役所、日吉地区センター共催「日吉地区歴史散策」の中で戦後五〇年企画として地下壕見学会開催三五名参加。申込七〇名で半数は断った

六、同二八日和泉区小中学校社会科教員による見学会二〇数名参加

七、九月五日第二回運営委員会開催。詳細は第三五号に掲

載済
八、同二七日会報第三五号発行
九、同二七日会報第三五号ならびに横浜市長と神奈川県知事に保存をもとめる署名用紙を会員宛五〇〇通発送
一〇、同二七日第三回幹事会開催
一一、同二五～一〇月四日大和市「終戦五〇年・平和都市宣言一〇周年記念事業における展示」にパネルを貸出す
一二、一〇月六～七日防衛庁戦史資料室軍事史学会主催、地下壕見学会予定
一三、一一月二日コープ東京による見学会予定
一四、同四日港北区小中学校教員による見学会予定
一五、同二六日保存会による見学会予定
一六、一〇月二一～二二日慶応高校日吉祭・サークル「戦争を考える会」で日吉台地下壕をメインに展示予定
一七、神奈川県高等学校教科研究会社会科部会による戦後五〇年シンポジウムに寺田事務局長がパネラーとして参加予定

議事
▼街頭署名について
＊一〇月八日午後二～四時日吉駅前で日吉在住の人で行う
▼署名用紙発送について
＊これまでの当会の行事に参加された方へ一〇月六日に発送する
＊準備が整い次第2次発送を考える
▼一一月二六日の地下壕見学会について
＊白鶴幹事が参加予定
▼次回運営委員会について
＊一一月一〇日を予定

運営委員会報告
第三回
一一月一〇日一八時～
慶大藤山記念館

報告
一、一〇月六～七日防衛庁戦史資料室軍事史学会主催見学会合計六〇数名参加
二、同六日署名用紙を非会員宛七〇〇通発送
三、同八日日吉駅前にて街頭署名七〇数名の賛同あり。一〇日の朝日新聞神奈川版に記事が掲載された
四、一七日横浜市教職員組合教育研究大会の平和人権分科会に共同研究者として寺田事務局長が参加。浜教組が署名に協力してくださることになった
五、同一九日署名用紙を非会員宛八〇〇通発送
六、同二一～二二日慶応高校日吉祭のサークル「戦争を考える会」が「戦争と慶応義塾」を展示、ビデオ上映、講演会を開催
七、同二五日神奈川県高等学校教科研究会社会科部会主催の「敗戦後五〇年シンポジウム～いま、神奈川から考える～」に寺田事務局長がパネリストとして出席
八、一一月二日コープ東京平和委員会による見学会一八名参加
慶大藤沢の学生が、文化祭用のビデオ撮影のため三名参加
九、同四日港北区の小中学校社会科研究会による見学会二〇数名参加
一〇、同一〇日運営委員会開催

議事
▼陳情書の提出日について
＊一二月四日、一一日、一四日を候補とする
＊市の担当者等との打合せを検討する